

学位論文内容の要旨

学位申請者	田中 直美 【人間発達科学専攻 平成24年度生】	要 旨
論文題目	対話的思想における人間形成論的研究 —H. アーレントから F. ローゼンツヴァイクへ—	<p>昨今の教育思想研究において、対話を取り入れた教育のあり方が積極的に議論されている。その議論に有力なモデルを提示しているのが、アーレントの公共性構築論に見られる〈問いかけ〉の思想である。本学位請求論文はまず、アーレントの対話思想が、母国語の尊重に端的に見られるように、自己中心性を免れていないということを明らかにする。そしてこの方向性だけでは、同化の暴力に陥るのではないかとの問題提起をする。このような危険性に対して、学位申請者はアーレントの出自がユダヤ人であることに着目し、アーレント思想に伏在するユダヤ的な発想に対話教育のあり方を刷新する可能性を見出す。そして、学位申請者が着目したのは、ローゼンツヴァイクの翻訳思想である。すなわち、ユダヤ思想は、対話的応答関係において「呼びかけられる」という受動契機を重視することにその特徴がある。ローゼンツヴァイクは、〈神からの呼びかけ〉（啓示や聖書）をモデルにして、異質な他者を自分の中に同化していくことを目指す従来の経験モデルに対して、異質性を認めて寄り添いながら異質なものと協同の中で自己を改変していくことの重要性を、旧約聖書の翻訳と翻訳論の中で示していると学位申請者は強調する。そしてこうした構えこそが、対話思想の刷新に繋がり、ひいては、これからの〈共生〉のあり方を考える際のモデルになりうると結論付けている。</p> <p>審査委員会は2回開催された。2015年12月16日に開催された一回目の審査委員会においては、おおむねユダヤ思想解釈としては妥当であると評価されつつも、先行文献レビュー形式の不備、〈共生〉が孕む潜在的暴力性への言及不足について疑問が提起された。2016年2月8日に開催された二回目の審査委員会において、前回指摘された問題点への対応状況を確認し、おおむね妥当な修正がなされているが、誤記など若干の修正すべき点が指摘された。2回目の審査会での指摘事項への対応を確認したうえで、2016年3月2日に公開審査を実施し、当日提起された質問に適切に回答できていることを確認した。</p> <p>以上により、本学位請求論文は、博士（社会科学）を授与するにふさわしいと審査委員会として判断した。</p>
審査委員	(主査) 教授 池田 全之	
	教授 米田 俊彦	
	准教授 富士原 紀絵	
	教授 小玉 亮子	
	教授 村岡 晋一	